



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	爆発する連環画 : 『地雷戦』と「爆破英雄」たち
Author(s)	田村, 容子
Citation	連環画研究, 5, 40-63
Issue Date	2016-02-28
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98436
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98436
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_5_40-63.pdf

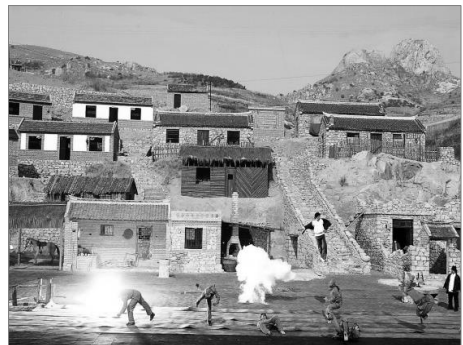


爆発する連環画——『地雷戦』と「爆破英雄」たち

田村 容子

2015年は、中国にとって記念すべき年であった。「中国人民抗日戦争および世界反ファシズム戦争勝利70周年」にあたるこの年の8月、中国ではテレビドラマ『地雷戦』（焦曉雨監督、呉樾主演、全46集）の放映が始まった¹。これは1962年につくられた、同名の中国映画のリメイクである。原作は中国共産党のプロパガンダ映画であり、日中戦争期、日本軍に抵抗した「抗日」英雄を描く。題名が示す通り、地雷を使って果敢に戦った「爆破英雄」が主人公である。

この題材は、日中戦争期、^{ジアオドン}膠東半島（山東省東部）に位置する^{ハイヤン}海陽県の農民たちが実際に地雷を用い、日本軍の掃討作戦に抵抗したという史実にもとづく。実在した「爆破英雄」としては、趙守福、于化虎、孫玉敏といった男女の民兵が有名である。それぞれの活躍が、人民共和国の「建国神話」として語りなおされた結果、『地雷戦』の物語はひとつではなく、「地雷戦サーガ」とも呼ぶべき一大叙事詩を形成している。彼らをモデルとしているため、一連の「地雷戦」ものの登場人物には、「趙」姓や、名前に「虎」「玉」といった字を使うものが多い。現在では、「海陽地雷戦景区」という、中国共産党の「愛国主義教育基地」もつくられている。そこは、62年の映画を追体験できるテーマパークとなっており、爆破場面の再現上演などもおこなわれているようだ【1】²。



【1】海陽地雷戦景区

2013年12月には、演劇『地雷戦2.0』（薪伝実験劇団、王翀演出）が東京で上演されている。国際演劇祭「フェスティバル／トーキョー13」の公募プログラムであった同作では、ラッパ型の拡声器が武器に見立てられ、戦争ごっこのような「地雷戦」が演じられた。とりわけ、録音した音を時間差で再生する拡声器の機能を使い、俳優らが音声を録音した「地雷」を仕掛け合い、音が鳴るとバタリと死ぬ、という動きをくり返す場面は、ブラックな笑いを誘うものであった³。かつてプロパガンダの道具であった拡声器が「地雷」となり、人びとがその「爆

発」を遊び、消費する姿は、戦争をプロパガンダに用いる国家そのものを、揶揄しているかのようでもある。

一瞬の破壊と、それがいつ起こるか分からない恐怖。映画『地雷戦』が人口に膾炙し、繰り返し改編されるのは、まさにこのような「地雷」の特性に、人びとをひきつけてやまない要素があるせいではないだろうか。ごっこ遊びのような「地雷戦」は、じつは1950年代から70年代にかけての中国のプロパガンダメディアの中に、しばしば見られるものである。本稿では、映画『地雷戦』とその連環画をはじめとする、地雷と「爆破英雄」たちを描く作品を眺めてみたい。

映画『地雷戦』のスリル

映画『地雷戦』（唐英奇、徐達、呉健海監督）は、1962年12月、八一電影製片廠によって製作された。この映画は「教学片」（軍事教育映画）と銘打たれ、膠東の抗日根拠地で繰り広げられる地雷戦を描く。民兵、農民と共産党八路軍兵士が力を合わせて手づくりの地雷を仕掛け、日本軍を撃退するという基本的なプロットはあるものの、農村での地雷のつくり方、効果的な地雷の仕掛け方といったゲリラ戦の戦い方を詳細に紹介する点が、通常の劇映画とは異なる特徴である。

「軍事教育映画」とはいえ、探雷器を導入し、スパイ活動や女装潜入などの方法で地雷を除去しにかかる日本軍に、民兵と農民たちが機知と智謀で対抗するこの映画は、「痛快活劇」と呼ぶにふさわしい。同時期には、『地道戦』（地下道戦、1965）など抗日ゲリラ戦を題材とした映画が中国共産党の指導のもとで多数製作された。それらに見られる誇張された戦争描写や、「愚かで滑稽な日本兵」といった典型的なイメージは、その後現在にいたるまで、中国における日中戦争ものの映画やドラマに影響を及ぼしている⁴。こんにちの中国では、「抗日神劇」と呼ばれる荒唐無稽なエンターテインメント抗日ドラマが流行しているが、『地雷戦』に見られる「活劇」要素が、それらの中に形を変えて受け継がれている側面もあるといえるだろう⁵。



【2】「石雷」を手づくり

映画『地雷戦』に見られる「活劇」要素とは、たとえば次のような場面である。農民たちは、限られた物資の中、鉄がないので石に火薬を詰めた「石雷」をみなで手づくりする【2】。これは石工の石大爺シーじいさんの発案によるが、こうした農民の知恵と工夫は次



【3】「夾子雷」(ねずみ取り式地雷)



【4】匱地雷を掘り当てた日本兵

第にエスカレートし、「子母雷」^{ゾームレー}(地雷と手榴弾を組み合わせる)、^{ディエンニューサン}「天女散花」^{ホワ}(石雷によって石つぶてを振らせる)、「夾子雷」^{ジャオソーレイ}(ねずみ取り式地雷)など、さまざまな名称と仕掛けの地雷が開発される【3】。

これらの地雷はまた、機知に富んだ戦術とともに用いられる。農民と日本軍とのあいだで、地雷の設置と除去という攻防がくり返される中、農民たちはさまざまな戦術を編み出す。たとえば、ダミーの地雷を埋める、時限装置付きの地雷を日本兵に持ち帰らせる、などである。はなはだしきは、日本兵が匱地雷を掘り当てると、それは少年の埋めた糞便だった、という奇策まで生み出される【4】。こうしたゲリラ戦でもっ

とも活躍するのは、主人公である農村の民兵隊長 趙虎だ。彼の指揮のもと、ほとんど武器を持たない中国の農民に、武装した日本兵はつぎつぎとやられてしまうのである。

やがて趙虎は、最大のピンチに直面する。麦の刈り入れの時期をねらって村に攻め込んだ日本軍は、石大爺ら村民を人質にとり、彼らを先に歩かせてふたたび村に侵攻してくる。もし地雷を埋めようものなら、人質の命が危ない。万事休す、と思われたそのとき、趙虎らは人質が前方で起爆装置を踏むと、後方に埋めた地雷が爆発する仕掛けを考案し、前を歩く仲間を救い、みごとに敵だけを爆破するのであった。

映画ならではの表現として圧巻なのは、村を襲撃する日本軍が家屋に侵入し、家の中のものを略奪しようとする、あらゆるものが爆発する場面である。扉や酒がめなどに仕掛けられた地雷が、日本兵が触れるとつぎつぎに爆発する。敵がよろめきながら家の外に逃げると、待ちかまえていたように地面も爆発する。まるで、教室の扉に黒板消しをはさんでおくような、子どものいたずらを彷彿とさせるこの地雷の連発は、映画『地雷戦』を「痛快活劇」たらしめている名場面といえるだろう。同作が長きにわたり語り継がれる理由は、おそらく多くの人びとにとって、埋める、掘り出す、時間差で爆発、どこに埋まっているかわからないといった地雷の描写によって生み出されるスリルが、忘れがたい興奮として記憶されているためではないだろうか。

連環画になった『地雷戦』



【5】『地雷戦』〔遼寧版〕表紙



【6】『地雷戦』〔浙江版〕表紙

雷」という「爆破英雄」のシンボルは、作中で「鉄西瓜」（鉄のスイカ）とも呼ばれ、後の改編に引き継がれていく。深読みすれば、このふたつの丸い地雷は、銃器がしばしば陰茎に喩えられるのと同様に、男性性の象徴といえるかもしれない。農民である趙虎は、その属性を示す武器として、八路軍兵士のもつ鉄砲ではなく、地雷をもたされている。そして、この地雷が手づくりの「石雷」ではなく「鉄」であることは、彼が鉱石から鉄を製錬するごとく、鍛錬された「民兵」の「男性英雄」であることをあらわしていると考えられる。

〔浙江版〕のほうは人物がより大きく描かれており、〔遼寧版〕で主人公の周りにいた農民たちは消え、代わりにひげを生やした男性が趙虎に寄り添う。この人物は、共産党八路軍から派遣されてきた、人民武装委員会の雷主任^{レイ}である。彼は映画『地雷戦』においても語り手という重要な役割を担っているが、その存在感は、文化大革命中に

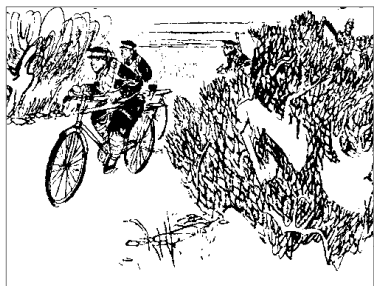
映画『地雷戦』は、1960年代から70年代にかけて、複数の出版社から連環画として出版されている。その中には、映画のスチル写真を貼りつけた映画版と、映画にもとづく絵画版が存在するが、ここでは1960年代と70年代に出版された絵画版を見ていくことにしたい。

使用する連環画は、『地雷戦』遼寧美術出版社、1964年12月第1版、全124齣⁶【5】と、『地雷戦』浙江人民出版社、1972年8月第1版、全138齣⁷【6】である。以下、前者を〔遼寧版〕、後者を〔浙江版〕と呼ぶ。また、〔浙江版〕は1973年5月に人民美術出版社から再版されたが、その際に二齣が削除された。このことについても後述するため、その際にはこれを〔人民版〕と呼び分ける。

まず、〔遼寧版〕と〔浙江版〕の表紙を眺めてみると、首からふたつの地雷を下げた横向きの男性が目に入るだろう。彼こそが主人公の趙虎である。この姿は映画の趙虎を踏襲したものであり、「首からぶら下げたふたつの地雷」

^{ティエシーグワ}

出版された〔浙江版〕ではとくに強調されている。〔浙江版〕の表紙では、雷主任のほうが趙虎よりも頭ひとつ高く、誰が指導者なのかがはっきりと示されている。



【7-1】〔遼寧版〕20 齣



【7-2】〔遼寧版〕21 齣



【7-3】〔遼寧版〕22 齣



【7-4】〔遼寧版〕23 齣

これらの連環画『地雷戦』は、いずれも映画にもとづく改編であり、〔浙江版〕にはそのことが明記されている。しかし、映画を連環画に改編する際、もっとも困難なのは、映画においてスリルを形成する大きな要因であった、爆発を待つ「時間」の表現であろう。

たとえば、映画の開始後11分あたりに、坂道を下ってくる日本軍一行に地雷を仕掛けた主人公趙虎らが、不安げに遠くから爆破の成否を見守る場面がある。映画はここで、自転車に乗って軽快に坂道を下りてくる対日協力者の中国人警官たちと、キセルに火をつけようとして火打ち石を打つが、なかなか火のつけられない趙虎とを交互に映し出し、見る者の気持ちを焦らせる。やがて趙虎のキセルに火がつくと、地雷もうまく爆発する。映画ではそのあいだに約45秒の時間が流れ、音楽や爆発音といった音響効果も挿入される。

いっぽう、連環画の同場面には、そのような「時間」は描かれない。あるいは、映画公開のすぐ後に出版された〔遼寧版〕のほうは、映画とは異なる方法でその「時間」を表現しようとしたというべきかもしれない。70年代の〔浙江版〕のほうは、原作の「軍事教育映画」としての側面を、連環画という媒体の特性をいかす方向に改編している。

まず、〔遼寧版〕の該当する場面を見てみよう【7】。〔遼寧版〕では四齣を費やし、20齣で日本軍を先導する中国人警官、21齣で地雷の起爆板を踏む警官ら、22齣で爆発の瞬間と脇道へよける日本兵、23齣で脇道でも地雷に爆破される日本兵を描く。

齣の下に附された説明文はいずれも短く簡潔なものであるが、21齣に〔遼寧版〕にのみ見られる独特の描写があるので、その部分を訳出する。

趙虎は林の茂みに隠れていると、二人の傀儡警官が自転車に乗って「鎮妖石」に近づき、自転車の車輪が地雷の踏み板に乗るところが見えた。⁸

ここではわざわざ「鎮妖石」なる岩の名前があげられているが、「鎮妖石」が何なのか、いかなる形状のものなのかは、これより前の齣の絵画、説明文ではいっさい触れていない。「鎮妖石」は、映画『地雷戦』のクライマックスを盛り上げる重要な「舞台装置」である。そのため、〔遼寧版〕はここで伏線を張ったと考えられるが、肝心の



【8-1】〔浙江版〕25 齣



【8-2】〔浙江版〕26 齣



【8-3】〔浙江版〕27 齣

「鎮妖石」が描かれていない。映画を見ていなければ、おそらくこの伏線に注意をはらう者は少ないだろう。しかし、映画の結末を知る読者にとって、この伏線は思わずにやりとするものであり、ここは〔遼寧版〕独自の改編の妙といえる。この「鎮妖石」の意味については、後ほど詳しく見ていくことにする。

〔遼寧版〕のこの場面では、爆発を待つ趙虎の姿が描かれることはなく、上掲の説明文で述べられるにとどまる。しかし四齣も使っていることと、21齣で起爆板を踏む瞬間をはっきりと描いていることにより、映画とはまた異なる、連環画特有の「時間」の流れをもたらしているようにも感じられる。

いっぽう、〔浙江版〕のほうでは、連続する三齣でこの場面があらわされ、説明文によって状況が解説される。以下にその部分を訳出する【8】。

25齣：前方は「黒犬」警官どもと自転車に乗った私服ゲリラ隊で、その後ろこそが日本兵だ⁹。

26齣：自転車は大きな道に沿ってやってくると、知らぬうちに地雷の起爆板を踏み、「ドン」という音で地雷が爆発した。——このような地雷を「踏雷^{ターレイ}」といい、踏み板を起爆装置とし、ひと足踏めばたち

まち爆発する。村の入り口、大通り、空き地などに埋めておくのに最適である¹⁰。

27齣：踏雷は何人かの「黒犬」警官を負傷させ、驚いた後方の敵は次々に自転車から落ち、もんどりうって道ばたに倒れ込むと、あにはからんや、またも「絆雷」に触れてしまった。——このような地雷は、敵の膝や足が紐状のわなに触るとすぐ爆発し、草むらや畑のへり、井戸端などによく埋められる¹¹。

こちらでは、絵画でも説明文でも、爆発を待つ趙虎の存在は描かれない。〔浙江版〕では爆発を待つ「時間」よりもむしろ、地雷の種類と効果的な戦術の紹介に重きがおかれている。絵画に注目すると、26齣の「踏雷」と27齣の「絆雷」の爆発を描き分けるような表現は見受けられないため、説明文がなければ、地雷がどのように設置され、どう爆発したかを読みとることは難しい。三齣の画面は、映画の同場面にも見られる視点の切り替えを用いてはいるが、〔遼寧版〕のような連環画特有の「時間」の流れ、そして映画にあったスリルは、いずれも消失しているといえるだろう。

連環画『地雷戦』に見られる改編と削除

そのほか、1970年代の〔浙江版〕のみに見られる特徴として、両性関係に関わる描写の改編、削除があげられる。映画『地雷戦』には女性の民兵が登場し、そのうち長い髪をおさげにした玉蘭と主人公趙虎とのあいだには、互いに憎からず思っていることがうかがえるような描写が見られる。

たとえば、紐状のわなに敵をひっかけて炸裂させる地雷を開発していた趙虎は、弾力のある糸を求めて、玉蘭の部屋をのぞく。ちょうど髪をとかしていた彼女に、「髪の毛を何本かくれないか」と頼みこむ趙虎。

直前の場面により、観客には彼の意図は明らかだが、そのことを知らない玉蘭には、愛情表現とも感じとれるセリフである。玉蘭は、「ばかなこと言わないで」と一瞬戸惑

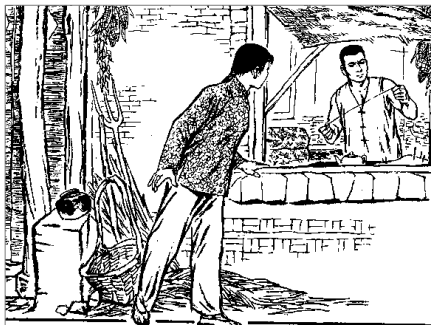
った後、彼の計画を察知したような表情を浮かべるが、わざと「あげない！」と意地悪を言う。趙虎は隙をついて彼女の頭から髪の毛を抜きとり、逃走する【9】。やがて完成した地雷の仕掛けに村民たちが感嘆していると、そこにあらわれた玉蘭は、おかっぱ頭に変身している。そして、照れくさそうに趙虎に、



【9】玉蘭の髪の毛を抜きとる趙虎

ぱっさりと切り落としたおさげを差し出すのだった……。

この映画で、玉蘭の髪型がおさげからおかっぱに変わることは、彼女が農民の少女から女性兵士へと、「階級」を移動したことを意味している。1960年代の中国のプロパガンダ芸術では、「おさげ＝少女」、「おかっぱ＝革命戦士」といった類型化された女性像が、すでにできあがっていた¹²。玉蘭のように、物語の中で「変身」する女性像としてもっとも有名なのは、革命模範劇の原作となった映画『紅色娘子軍』（謝晋監督、1960）のヒロイン吳瓊花^{ウーチオンホワ}だろう。同作では、吳瓊花を導く男性英雄が彼女を奴隸から女性兵士へと「成長」させるが、そのことを象徴するのが吳瓊花の断髪であった。映画『地雷戦』では、玉蘭が変身する際、趙虎への思慕がその原動力となったことがほのめかされ、「階級」の移動が女性の男性英雄に対する愛情の物語と結びつけられている。こうした描写は、映画『紅色娘子軍』にも見られるものである。



【10】『地雷戦』（浙江版）75 齣

ところが、文化大革命中である1972年の〔浙江版〕では、男女は愛情ではなく階級闘争によって結びつくべきとされたためか、このくだりは削除されている¹³。〔浙江版〕では、地雷の実験をおこなっている最中の趙虎の部屋を玉蘭がのぞいており、そのとき、趙虎はすでに頭髪を手になっている。彼の用いた長い頭髪が、いったいどこからきたものなのか、説明はない【10】。

その後、趙虎の地雷の仕掛けを知った玉蘭は、みずから髪を切って趙虎に差し出す。「髪の毛にこのような重要な用途があると知ったとき、彼女は大事にしていた長いおさげ髪をも捧げたのだ」¹⁴と説明文で述べられるように、〔浙江版〕では、抗日のために断髪も辞さない女性民兵像が強調されている。

もうひとつ、〔浙江版〕において削除されている場面に、さきに述べた少年の仕掛けた匱地雷が、日本兵に「炸裂」するくだりがある。文化大革命期の連環画ゆえ、そうした「ふまじめ」な場面は、むろん描かれないのだろう。ちなみにこの場面、1960年代の〔遼寧版〕では、匱地雷を掘り当ててしまった日本兵の姿がしっかりと描写されている【11】。



【11】〔遼寧版〕75 齣



【12】でんでん太鼓に夢中の少年



【13】『地雷戦』〔浙江版〕87 齣

〔浙江版〕では、少年の人物造型そのものも改編されている。映画『地雷戦』には、見張りに立った少年が、「八路軍十六団の偵察兵」と名乗る男、じつは対日協力者であるスパイに、でんでん太鼓で簡単に懐柔され、地雷の秘密を教えてしまう場面がある【12】。

映画では、異変に気づいた女性民兵が少年を問いただすのだが、〔浙江版〕では、少年はみずから過ちを犯したことに気づく。そもそもこの少年には、でんでん太鼓に目を輝かせ、見知らぬ相手と打ち解けるといった描写はなく、失態に気づいた後、彼はすぐさま槍を持って駆けだしている【13】。少年の頭上の枠線が途切れ、背景と女性民兵が斜めに置かれた構図にも、彼の緊迫感が表現されている。

少年の戦い方が、1960年代には糞便を埋めておくといったたあいがないものであったのが、70年代には武装に変わる。文化大革命期にお

いては、少年も一人前の兵士なのである。

ところで、先述したように、〔浙江版〕は1973年5月に人民美術出版社から再版された際、9齣と99齣の二齣が削除された。この二齣が削除された理由は、主に9齣の問題であると考えられる。というのも、連環画『地雷戦』の最終齣は、〔浙江版〕、〔人民版〕ともに二頁を見開きで使い、横長の齣の中に勝利する八路軍兵士と農民たちを描くものであるからだ。この最終齣の見開きを保持するためには、ある一齣を削除した場合、もう一齣を削らねばならない。〔浙江版〕99齣の説明文は、〔人民版〕97齣にほぼ移しかえられていることから、99齣はプロットに影響のない一齣として、調整のために削除されたものと思われる。

では、〔浙江版〕9齣【14】はなぜ削除されたのだろう。この齣は、前の齣で描いた



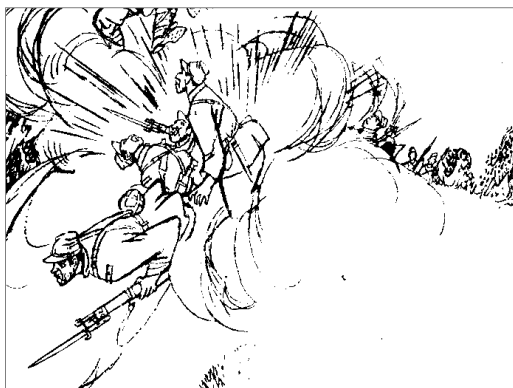
【14】『地雷戦』〔浙江版〕9 齣

三人の女性兵士の姿を、もう一度正面から、大寫しで描くものである。説明文では、女性民兵の ディエンサオ 田 嫂と アルマン 二嫂が、八路軍の雷主任に以下のように問う部分が削除されている。「つづけてまた聞いた。「上はうちに鉄砲を分けてくれるのかね？」」¹⁵。

映画『地雷戦』の見どころのひとつは、ゲリラ戦の中で女性民兵たちも地雷を巧みに操り、日本兵を殺して鉄砲を巻き上げる場面である。連環画においても、この場面は描写される。だが、そもそも彼女たちに武器が行き渡らず、手づくりの地雷で戦わねばならない理由が、八路軍の武器不足であるかのように受け取られかねない描写を、〔人民版〕では周到に避けたのではないだろうか。つづく齣では、雷主任が毛沢東の『論持久戦』を取り出し、「武器は戦争の重要な要素だが、決定的な要素ではなく、決定的な要素は人であって物ではない」¹⁶とうやうやしく読み上げる。

なお、映画『地雷戦』と『地道戦』は、1966年2月、毛沢東夫人江青が上海で召集した部隊文芸工作座談会において批判を受けたことがあり、その際映画の軍事指導を担当した王耀南は、これらは「毛主席の『論持久戦』精神を貫徹したもので、軍事教材であり、劇映画ではない」ととりなした。その後、「軍事教育映画」と銘打つことを条件に、文化大革命中も上映を認められたという¹⁷。こうした事情が、連環画の改編に反映されたとも考えられるだろう。

総じていえば、1970年代の連環画『地雷戦』からは、映画にあった爆発にともなうスリルが消失し、両性のあいだの愛情を想起させる場面など、地雷戦に直接関わりのないエピソードを削除するといった改編がなされている。そうした中で、女性民兵の「女性」、少年の「子ども」といった特徴の描写は弱められるが、この点は、文化大革命期のプロパガンダ芸術全体に共通する傾向といえるだろう。それらに代わり、連環画ならではの特性が発揮されているのが、地雷の解説である。説明文を用いることのできる連環画では、地雷の種類や設置法が言葉で詳細に述べられ、読者の理解を補う。



【15】『地雷戦』〔遼寧版〕59 齣

つまり、原作の「軍事教育映画」の側面が強調された〔浙江版〕は、地雷の解説書として読むことも可能なのである。

また、爆発表現に注目すると、1960年代の〔遼寧版〕【15】と70年代の〔浙江版〕【16】のあいだには、放射状に広がる爆風や閃光を示す線、雲状に広がる硝煙といった共通する描き方が見られる。そのいっぽう、衝撃を受ける人体の表現や線



【16】『地雷戦』〔浙江版〕31 齣

の強弱などは、絵師によってさまざまに技巧が凝らされていることがわかる。

映画と異なり、爆発の瞬間を静止画であらわさねばならない連環画の爆発表現は、1970年代にいたるまで、どのように模索されてきたのだろう。次に、地雷を描く連環画をいくつか取り上げ、1950年代から70年代にかけての変遷を眺めてみたい。

地雷を描く連環画と教育書

地雷を描く連環画は、1950年代、朝鮮戦争を題材としたものにすでに見ることができる。1952年11月の『地雷』¹⁸は、朝鮮の少年趙林清^{チョリムチョン}が地雷を線路に仕掛け、敵の列車を爆破するまでの過程を、四齣を費やして説明する。

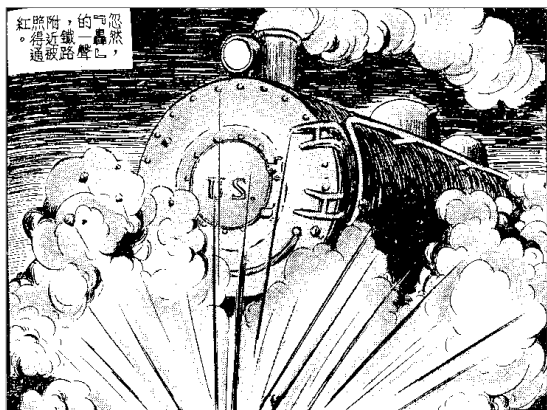
この連環画では、初めて地雷なるものを用いる少年が、一発しかない地雷を線路に埋めて敵の列車を爆破することで、彼にできる最大限の抵抗をおこなう場面が描かれている。画中には縦書きの説明文が附されており、右とじ、左開きの単行本に収められている。そのため、画面も読者の視線を右から左へ向かわせるように構成されており、列車の進行方向もその流れに沿っている。ここでは、単行本の配置に従って四齣を提示したい【17】。



【17-2】待てど暮らせど、待ちくたびれて気はあせり腹はへれども、列車が来る気配はない。



【17-1】趙林清は線路まで走って行き、たった七分で、地雷をすっかり埋めてしまった。



【17-4】突然、「ドン」という音とともに、線路のあたり一面が真っ赤に照らされた。



【17-3】夜明けまで待ちつづけたそのとき、遠くのほうからガタゴトと響く音が聞こえ、長々と連なった列車がやって来た。

【17-2】で待つ少年、【17-3】で近づいてくる列車を描き、この二齣によって爆発を待つ「時間」が表現されているところに、地雷のスリルを伝えようとする描き手の工夫がうかがえる。

1960年4月の『爆炸英雄李混子』（爆破英雄李混子）¹⁹になると、地雷戦の戦い方がより複雑になり、機知に富んだ地雷の使い方が見られる。以下は、時限装置付きの地雷が爆発する様子を描く、連続した二齣である【18】。

24 齣は、明け方に地雷を拾った対日協力者と日本兵が、それがなかなか爆発しないので、八路軍が開発したと噂の、日光に反応して爆発する「太陽雷」^{タイヤンレイ}ではないかと思ひ込み、夜が明ける前にあわてて屋内へと運び込む場面である。つづく 25 齣は、説明



【18-1】『爆炸英雄李混子』24 齣



【18-2】『爆炸英雄李混子』25 齣

文によって次のように述べられる。「あにはからんや、太陽雷は気が変わり、太陽が出てもないのに、室内に持ち込むとすぐに爆発した」²⁰。

ここではまず、敵の描写に注目したい。建物には、それが日本軍のものであることを示すために、「武」と書かれたのれんや酒瓶が描き込まれている。【18-1】に描かれる三人のうち、眼鏡をかけて皮革の長靴をはいているのが日本兵である。彼は対日協力者である中国兵を指図して、地雷を運ばせている。中国兵は足にゲートルを巻き、布靴をはいている。

爆発の描写に目を向けると、【18-2】では爆風と閃光を示す線の書き込み、そして後方にのけぞる人物、左側に飛び散るレンガと酒瓶により、屋内の爆発の衝撃が表現されている。1952年の『地雷』と比較すると、地雷が爆発するのを待つ「時間」を描くのではなく、地雷の爆発の仕方に趣向が凝らされた二齣といえるだろう。こうした地雷戦の戦術の複雑化は、この作品においては、遊戯化という方向にも展開していく。

『爆炸英雄李混子』は、地雷を使ったゲリラ戦を得意とする民兵李混子^{リーフンツ}の活躍を描く連環画である。神出鬼没の彼の作戦に翻弄された日本軍は、とうとうその首に懸賞



【19-1】『爆炸英雄李混子』41 齣



【19-2】『爆炸英雄李混子』42 齣

金をかけ、「捕まえたものには三百大洋元」と書かれた貼り紙を出す。ところがその翌日には、「李混子ここにあり」と書かれた貼り紙が、隣に貼られていた！【19-1】

怒った日本兵は、警備の中国兵に、貼り紙を剥がすよう命じる。中国兵が貼り紙を銃剣で突き刺すと……

貼り紙の裏に仕掛けられていた地雷が炸裂し、中国兵の首は吹き飛んでしまう。驚いた日本兵は、あわてて逃げ去るのであった【19-2】。

貼り紙の裏に、いったいどのようにして地雷を仕込んだのか、『爆炸英雄李混子』に詳しい説明は述べられていない。それよりも、日本軍を挑発しながら、機知に富んだ手法で地雷戦をつぎつぎと成功させていく李混子の作戦の意外性と巧妙さが、読者をひきつける要素となっている。

この作品により、1960 年あたりから、後の映画『地雷戦』や『地道戦』において完成されるような、ゲリラ戦を複雑かつ遊戯的に描く戦争ものが生み出されていたことがうかがえるのではないだろうか。また、爆発の際に首が吹き飛ぶといった身体描写も、ここでは読者に視覚的な刺激をもたらす、記号化された表現として用いられていることが指摘できよう。

1966 年 2 月には、地雷のつくり方や設置法を指南する教育書も出版されている。中国人民解放军工程兵司令部編の『地雷和地雷戦』（地雷と地雷戦、中国青年出版社）は、「民兵軍事知識叢書」の一冊である。このような叢書が編まれた背景について、前書きで説明されているので、その一部を引用する。

「全民皆兵」とは、毛主席の人民戦争の、偉大な軍事思想の産物である。〔中略〕1958 年に毛主席が「民兵師団に大いに力を入れよう」と呼びかけてから、民兵の組織は空前の大発展を見せ、民兵の業務は新たな歴史的段階に突入した。

目下、アメリカ帝国主義はまさにベトナム侵略の戦争を拡大させており、全世界において侵略政策と戦争政策が一段と推し進められている。やつらは我が国の領土である台湾の不法占有をつづけ、軍艦や軍用機を不断に派遣し、我が国の領海や領空を侵犯し、軍事的挑発をおこなっている。蒋介石ら匪賊どもはアメリカ帝国主義のもと、武装した悪のスパイを不断に差し向け、攪乱工作を進めている。すでに打倒された反動階級とそれらの社会主義を敵視する分子は、死んでもあきらめず、愚かにも復辟を企んでいる。帝国主義と反動派のあるかぎり、我々は手中の武器を放すわけにはいかず、いつも警戒心を保たねばならない。我々は必ずや毛主席の著作を努力して学び、政治思想の自覚を高め、積極的に軍事訓練に参加し、敵を殺す能力を増強し、民兵の任務を真剣に執行し、強固なる国防と、社会主義革命と社会主義建設を防衛するために戦うのだ。ひとたび緊急状況が発生したら、我々民兵は、「召集されればただちに來て、來れば戦い、戦えば勝つ」を真に実行し、解放軍に力強く協力し、敵を徹底的に殲滅することができるのである。²¹

『地雷和地雷戦』は、「地雷常識」、「地雷の製作の応用」、「地雷の設置の応用」、「地雷戦」の四章から成り、この一冊があれば空き缶や空き瓶といった日用品から地雷をつくり、地雷戦を戦うことができるようになっている。石雷やねずみ取り式地雷、家屋のあちこちに仕掛けられる地雷など、映画『地雷戦』に登場する地雷の仕掛けも図解されており、結果として、映画の副読本としても楽しめる。映画を見て、ゲリラ戦

士にあこがれるよいこにとっては夢のような一冊だが、危険な書物ともいえるだろう【20】。

1950年代から中国のプロパガンダメディアで取り上げられていた地雷、とりわけ民兵による地雷戦は、60年代には戦争ものとしての虚構性が強められ、文化大革命の始まる頃には、「帝国主義の脅威」に対抗するための教育書の題材にもなったのである。

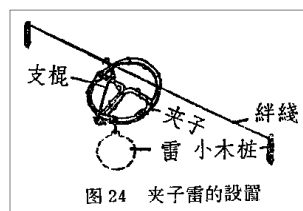
1967年、中国共産党の機関紙『人民日報』は、「二年八カ月の期間に五回の核実験をおこなった後、本日、1967年6月17日に、中国最初の水爆が中国の西部地区上空において爆発に成功した」²²と報じている。

1960年代から70年代にかけて、中国は原爆、水爆の開発に力を入れており、水爆実験の成功は大々的に宣伝され、祝賀された。火薬を用いる地雷と核兵器では、爆発の規模も種類も異なるが、こうした冷戦構造下の水爆実験成功が、爆発を描く連環画の出版状況にも影響を与えていたかもしれない。

文化大革命期には、児童向けの連環画にも地雷が描かれている。



【21】『巧布地雷陣』表紙



【20】『地雷和地雷戰』ねずみ取り式地雷（上）と屋内の地雷設置の例（下）

1975年9月の『巧布地雷陣』（巧みに地雷陣をしく）²³は、通常の連環画が「六四開」と呼ばれる大きさ（およそ縦9cm×横12.5cm）であるのに比べ、「四〇開」という大判サイズ（およそ縦14.5cm×横13cm）である【21】。説明文に出てくる難しい漢字には、ピンインによって発音が注記されているところから、低年齢の児童向けと考えられる作品である。この種の連環画は通常、頁の全面に絵が描かれ、彩色されており、齧の枠線がつけられていない。そのため、日本の絵本の小型版といった趣である。

この作品では、『地雷戦』と同様、膠東の民兵である趙大勇ジャオダーヨンの地雷を用いたゲリラ戦が、全 30 頁にわたって展開する。地雷の表現に着目すると、終盤、「大坂」という日本軍の将校を爆殺する場面が二頁を使って見開きで描かれている【22】。

この場面の説明文は、次のように述べる。

「大坂にはいったい何が起きたかわからぬうちに、「ドン」と音がして、馬の蹄の下でまた一

筋の火の光が立ちのぼると、煙の中で大坂は空中に放り出され、爆破されて見えなくなっていました」²⁴。

画中の「大坂」こと日本兵の顔は暗い緑色に塗られ、彼は「怪物」であって人ではないと表現されている。児童向けの読みものとしてはいささか刺激の強い場面と思われるかもしれないが、こうした処理によって、子どもたちも安心して楽しめるのである。

1976 年、毛沢東が死去し、文化大革命が収束した後には出版された連環画にも、まだ地雷は登場する。1978 年 7 月の『爆炸大王』（爆破大王）²⁵は、これまでに見てきた地雷ものの総集編といえるようなプロットを持つ【23】。



【23】『爆炸大王』表紙



【22】『巧布地雷陣』27、28 頁

膠東の民兵の英雄、趙守福ジャオショウフーは日本軍とのあいだに熾烈な地雷戦を繰り広げ、その活躍が認められて、海陽県の民兵英雄模範大会で「爆破大王」として表彰される。日本軍は彼の首に懸賞金をかけるが、趙守福は薪の運び屋に扮し敵陣の偵察をおこなった後、日本軍のトーチカにたった一人で潜入し、中国人民を苦しめてきた登記所の爆破工作を試みる。



【24】『爆炸大王』70 齣

衣服を脱ぎ捨て、パンツ一丁の姿になった趙守福は、幾重にもはりめぐらされた鉄条網や塹壕を乗り越え、入り口である南門の下に地雷を仕掛けた後、登記所の窓から屋内に侵入した【24】。説明文は、次のように述べる。

「彼は登記所を眺め回すと、一発の地雷を扉の裏側にぶら下げ、もう一発の地雷を事務機のそばのく

ずかごの中に入れて、地雷の線を椅子の脚に巻きつけた」²⁶。

絵画は、不敵な笑みを浮かべる「爆破大王」のたくましい裸体を描く。

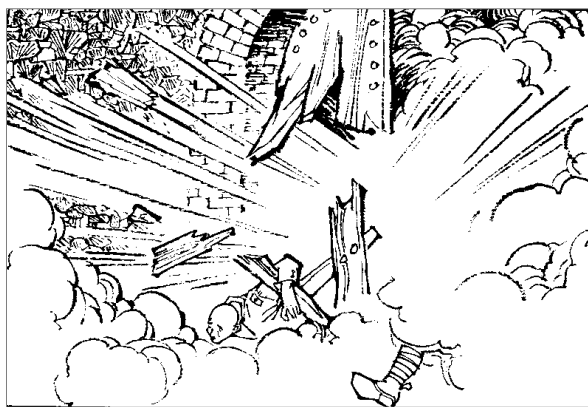
文化大革命期のプロパガンダ芸術において、鋼のような身体と太い眉を持つ男性英雄像はすでに確立されていたが、それに加え、この連環画の共産党ゲリラ戦士は、ニヒルな魅力さえ醸し出している。男性主人公の裸体が何頁にもわたって描かれるというのも、『地雷戦』をはじめとするそれ以前の地雷ものの連環画には見られない特徴だが、文化大革命の収束した 1978 年という時期のせいであるのかもしれない。

趙守福が南門に仕掛けた地雷は、次の日、日本兵が門を開けた瞬間に炸裂した【25】。

「翌日の朝、根拠地にやって来た日本兵が扉を開けた瞬間、ドカンと音がして、南門の下の地雷が爆発し、二枚の門扉は爆破されてばらばらになった。門を開けた日本兵も、そのしがたい命を失った」²⁷。

この場面では、門扉とともにばらばらになった日本兵の身体と足が描かれている。しかし、連環画『爆炸大王』において真に注目に値するのは、日本兵よりも大きな抜いで描写される対日協力者、^{ダーマーズ}大麻子の存在であろう。大麻子とは、日本軍の登記所所長のあだ名で「大きなあばた」を意味し、彼は日本軍に雇われている中国人である。

文化大革命期のプロパガンダ芸術であれば、物語のいちばん最後に成



【25】『爆炸大王』73 齣



【26】『爆炸大王』75 齣

爆破される大麻子は、その「あばた面」がはっきりとわかるように描かれており、何らの身体的特徴を持たない、名も無き日本兵が描かれていた 73 齣とは、好対照を成している。

すなわち、文化大革命を経たこの連環画では、もっとも強大な、かつ憎むべき敵は日本軍ではなく、説明文において「民族のクズ（民族敗類）」と称される「内部の敵」であるというように、敵のイメージに大きな書き換えがほどこされているのである。毛沢東死去後の江青ら「四人組」の逮捕や、『爆炸大王』出版の翌月に締結された日本と中国とのあいだの平和友好条約の交渉といった事情も、膠東における地雷戦を描く一連の地雷ものとはほぼ同じプロットを持つこの連環画において、「最大の敵」の像が修正されたことに影響を与えているのであろう。

「鎮妖石」——地中に埋められる石

最後にふたたび、映画『地雷戦』とその連環画の話に戻りたい。



【27】「鎮妖石」と日本軍隊長

敗されるのが最大の敵であり、それは日本軍の総大将であるというのが常套であった。ところが、文化大革命後のこの作品においては、さきに見たように日本兵は早々に爆破されてしまう。趙守福がもっとも苦心して設置した地雷で倒されるのは、日本兵ではなく中国人の「売国奴」なのである【26】。

登記所に仕掛けられた地雷で爆

「最大の敵」をいかにして倒すか——あらゆる善悪の対立を描く物語において、この問題はときに結末のカタルシスを左右する。映画『地雷戦』では、さきに述べたように、「鎮妖石」という巨大な岩が終盤で重要な役割を果たす。村の入り口にそびえる「鎮妖石」は、日本軍の侵攻時に一緒に映され、映画の中でしばしば日本軍の隊長中野とともに画面にあらわれる【27】。

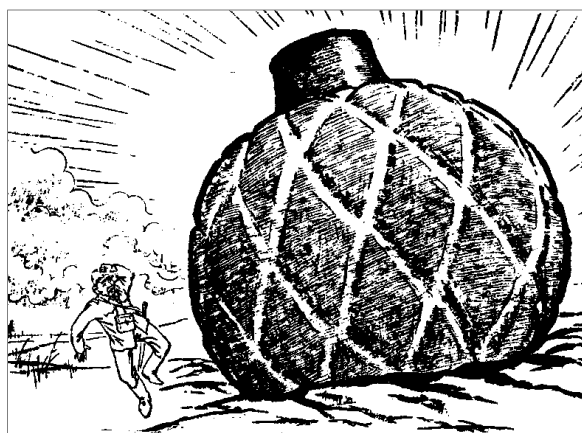
そして映画のクライマックスでは、中国側の地雷作戦に追い込まれた隊長は、たった一人、ふたたびこの岩の前にたどり着く。彼はこのとき錯乱状態にあり、巨大な岩が巨大な地雷に見える、という場面が、映像によって表現される【28】。

「鎮妖石」の存在は、連環画においても描かれ、隊長はこの岩の前で地雷によって倒される。ただし、1964年の「遼寧版」には、「鎮妖石」を巨大地雷に見間違えるという描写はなく、巨大地雷が画面に登場する



【28】「鎮妖石」が巨大地雷に見える

こともない。そのため、ここでは、より忠実に映画を再現する、1972年の「浙江版」の二齣を見ていきたい。説明文は、次のように述べる【29】。



【29-1】『地雷戦』〔浙江版〕131 齣



【29-2】『地雷戦』〔浙江版〕132 齣

131齣：中野は傷の痛みをかまうひまもなく、よろめきながら、命からがら逃げようとした。彼はすでに地雷の衝撃でもうろうとしており、頭の中はずっと地雷の爆音がドカンドカンと鳴り響いているようだった。ひとしきりめまいがし、天地が回っているような感じがすると、目の前に突然巨大な地雷があらわれ、しかもだんだん大きくなる。彼は肝をつぶさんばかりに驚いた²⁸。

132齣：中野は全身にびっしょりと冷や汗をかき、目をこすってよく見ると、なんとそれは巨大な岩で、表面に「鎮妖石」と大きな字が三つ彫り込まれていた²⁹。

この岩のそばには、「侵略者之墓」という墓標が村民によって立てられていた。つづく場面で、幻覚におののいた隊長は、墓標に斬りかかって地雷を踏み、爆死する。では、『地雷戦』における「最大の敵」たる日本軍の隊長は、なぜ「鎮妖石」の前で倒されなければならなかったのだろうか。

映画『地雷戦』の原案となった1940年代の小説『李勇大擺地雷陣』（李勇大いに地雷陣をしく）³⁰には、このような場面はない。映画の撮影を務めた鄭治国によれば、この「鎮妖石」の発案は撮影スタッフであり、現場にあった岩にわざわざ文字を彫り込んだという³¹。

『地雷戦』に描かれるのは、穴を掘って地雷を埋め、敵がそれを掘り返すと、また新たに地雷を埋めるという攻防である。そして、その地雷の多くは石でつくられた「地雷」であり、中に詰められる黒色火薬の原料にも硝石が用いられる。この、「地中に埋められる石」という地雷の特性と、「鎮妖石」の存在からは、中国の物語世界に脈々と受け継がれる「石」と「蛇」の物語が想起されないだろうか。

まず、「石」の物語としては、石から生まれ、身体に鉱物の特性を帯びた孫悟空が妖怪を退治する『西遊記』や、謎の石碑を掘り返したことにより、封印されていた百八人の魔王が飛び散った、『水滸伝』の冒頭が思い起こされる³²。

いっぽう、「蛇」の物語には、唐代伝奇小説「古鏡記」や「李黄」など、穴に巣くう蛇の怪異譚がある。よく知られたものとしては、白蛇の精が調伏され、雷峰塔の下に鎮められる明代の白話小説「白娘子永鎮雷峰塔」（白娘子とこしえに雷峰塔に鎮められること、『警世通言』所収）があり、この白蛇伝説は、「石」と「蛇」の関係を端的に示している。地中に埋められた石（あるいは塔・石碑）が、地中に潜む蛇（怪物）を石の力で封印するというプロットは、古代から現代にいたるまで、幾度も語りなおされてきた。蛇を「水怪」ととらえれば、「石から生まれた」（『淮南子』）とされる禹の治水事業もまた、この種の物語だといえるだろう。

映画『地雷戦』では、こうした民間伝承や古代からの呪術的感性が、近代戦における地雷の爆発描写に取り込まれたのではないかと考えられる。人民共和国の「建国神話」である『地雷戦』には、「鎮妖石」によって守られてきた土地を荒らす邪悪なものを、石からつくった地雷で退治し、「鎮妖石」の力で封じる、という古代神話に見られる物語が換骨奪胎されているのである。

連環画『地雷戦』においても、「鎮妖石」の前での日本軍の隊長の死が、最後の大爆発として描かれている。この場面の説明文には、「玩火自焚（火をもてあそんで自らを焼く）」という言葉が使われている。この爆発が「鎮妖石」を巨大地雷と思ひ込む幻覚



【30】『地雷戦』〔浙江版〕135 齣

によってもたらされ、石の力によって敵が封じられることが、「最大の敵」を倒すという結末の場面に物語としての安定感を与えているのである【30】。

ところで、「爆発」を想像する際に取り込まれる呪術的感性は、地雷や水雷について記載された明代の書物『火龍經』(14世紀中葉～16世紀)にすでに見ることができる。たとえば、この中に描かれる水雷

には、「水底龍王砲」という名前がつけられている。龍は、『山海經』など中国に伝わる古代の地理書においては、水や雨と関わる雷神であり、同時に光や火をあらわし、戦火や干魃を招くものとしても想像されていた。蛇もまた龍と似た属性を持ち、龍や蛇といった「怪物」は、中国人が火器や火薬を用いる武器を考案するとき、その霊的な力を恐れるいっぽう、自らの武力を高めるために信仰する対象ともなっていたと考えられる。

時代が下り、日清戦争のあたりになると、『点石斎画報』³³などの絵入り新聞における報道にも、爆発事件と龍や蛇といった怪物の出現を結びつけるものが見られるようになる。そして、興味深いことに、日清戦争期の日本兵と彼らが用いた地雷についての記述の中にも、連環画『地雷戦』の「玩火自焚」とよく似た表現を見つけることができる。1894年、光緒20年11月26日の「自投羅網(自ら投げた網にかかる)」と題された記事がそれである【31】。

記事には、撫順を侵犯し金州を占領した日本軍が、地雷を埋めた上に首飾りや銀時計などをばらまき、強欲な清軍をおびき



【31】「自投羅網」『点石斎画報』

よせようとしたところ、この密計を知るのは將軍と護衛兵だけであったため、三千人あまりもの日本兵が自らわなにかかり爆破されてしまった、と書かれている。

絵師金蟾香の手になる挿画には、放射状に広がる線と雲状の硝煙が描かれ、この頃すでに、連環画にも見られた爆発表現が生み出されていたことがわかる。飛び散る手足や首、逃げまどう日本兵の姿もあり、どうやらこのあたりから、日本軍のおこないを因果応報とみなす物語がつくられていったようである。

また、日清戦争を経た1897年、光緒23年5月26日の『点石齋画報』には、「龍穴已破（龍の穴はすでに破られた）」という記事が見られる。これは、鉄道が敷設されている九龍山という土地に西洋人が家を建てようとしたところ、大蛇が三頭あらわれたという事件を紹介するもので、土地の人の言葉として、九龍山には九匹の龍が穴にすみついており、いま風水が破られたので、どのようなことが起こるかわからない、と述べられている。

日本軍の悪報や、鉄道の敷設を伝える報道からは、清末の中国における「爆発」や「鉄道」が、近代の「怪物」と目されていたことがうかがえる³⁴。これらの事象は、新奇な画題ゆえに『点石齋画報』でもしばしば取り上げられているが、その際にも、因果応報譚や龍あるいは蛇の怪異譚が取り込まれて語られるのである。

映画『地雷戦』とその連環画の結末にあらわれる「鎮妖石」の存在は、この物語が石によって妖を鎮圧する、中国の怪異譚の系譜に連なるものであることをあらわしている。そのことはまた、中華人民共和国における日中戦争の記憶が、いにしえの根源的な畏怖や驚異、日清戦争期に形成された日本人イメージなどの磁場のもとに形づくられていったことを示している。

いまでも、山東省海陽市の映画ロケ地には、「鎮妖石」がそびえ立つ。それは、中国共産党の「妖怪」退治を記録する媒体であるとともに、いつの日か、ふたたび石が掘り返され、封印された妖魔どもが飛び出すかもしれない可能性を内に秘めた装置ともいえるのだろう。

¹ 以下のサイトで視聴可能である。http://www.iqiyi.com/a_19rrhb9gyd.html?vfm=2008_aldbd（2016年2月6日確認）

² 図版は以下のサイトによる。<http://www.ytbbs.com/forum.php?mod=viewthread&tid=5283980>（2016年2月6日確認）

³ 同作については、2013年12月7日14時の公演をシアターグリーンにて観賞したほか、2014年5月18日の鳳凰視頻の番組「星光大劇院」による作品の紹介を参照した。番組サイトは以下の通り。<http://v.ifeng.com/history/wenhuashidian/2014005/014054e5-a060-49a4-9a22-44f048fbdaf1.shtml>（2016年2月6日確認）

⁴ 劉文兵『中国抗日映画・ドラマの世界』祥伝社、2013年、113-120頁。

-
- ⁵ 同上、175-182 頁。「抗日神劇」の代表的な作品として、『抗日奇俠』（2011）があげられる。武術で日本兵を倒したり、強姦場面を挿入したりするエンターテインメント抗日ドラマは、「雷人」（ショックを与える）というスラングから、「抗日雷劇」とも呼ばれる。日中戦争を題材としながらも、「セックス&バイオレンス」を描くことに傾きがちなこの種のドラマに対して、中国の映画やテレビなどのメディアを管理する国家新聞出版广电总局は、2013 年 5 月に規制を開始している。
- ⁶ 柳其輝原著、韓英民改編、蘇正剛画、馮建鑫表紙設計、印刷数 10 万冊。
- ⁷ 遂昌県征文辦公室供稿、梅安才・呉元傳改編、張為民画、印刷数不明。
- ⁸ 『地雷戦』遼寧美術出版社、1964 年 12 月第 1 版、21 齣。原文は以下の通り。「赵虎隐蔽在树丛内，只見两个伪軍騎自行車走近“鎮妖石”，自行車的輪子压下了地雷的踏板」。文字表記は原文に従った。
- ⁹ 『地雷戦』浙江人民出版社、1972 年 8 月第 1 版、25 齣。原文は以下の通り。「前头是一些“黑狗子”和骑着自行车的便衣队，后边才是鬼子兵」。
- ¹⁰ 同上、26 齣。原文は以下の通り。「自行车顺着大路骑来，不知不觉地压着了地雷踏板，“轰”的一声地雷炸开了。——这种雷叫“踏雷”，用踏板作发火装置，一踩就炸。把它埋在村口、大道、场地上这一类地方是最合适的」。
- ¹¹ 同上、27 齣。原文は以下の通り。「踏雷炸伤了几个“黑狗子”，吓得后面的敌人纷纷摔下车来，跌跌撞撞跌倒在路边，不料又碰上了“绊雷”。——这种雷只要敌人腿或脚一碰上绊弦就炸，常埋在草地、田边、井口」。
- ¹² 詳細は田村容子「革命叙事と女性兵士——中国のプロパガンダ芸術における戦闘する女性像」『地域研究』14(2)、2014 年、田村容子「小説から連環画へ——王汶石「新結識的夥伴」とその連環画作品について——」『野草』93、2014 年を参照されたい。
- ¹³ 文化大革命期のプロパガンダ芸術に見られる両性関係の表現については、牧陽一、松浦恆雄、川田進『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店、2000 年、前掲田村容子「革命叙事と女性兵士」などを参照されたい。
- ¹⁴ 前掲『地雷戦』〔浙江版〕、77 齣。原文は以下の通り。「当她知道头发丝有这么重要的用处，把心爱的长辫子也献出来了」。
- ¹⁵ 前掲『地雷戦』〔浙江版〕、9 齣。原文は以下の通り。「接着又问：“上级能发给咱们几枝枪吗？”」。
- ¹⁶ 前掲『地雷戦』〔浙江版〕、10 齣。原文は以下の通り。「武器是战争的重要因素，但不是决定的因素，决定的因素是人不是物」。説明文ではこの部分のみゴシック体が用いられ、強調されている。〔人民版〕では 9 齣に置き換えられる。
- ¹⁷ 黄洋・黄愛国「王耀南將軍与電影《地雷戦》《地道戦》」、『党史文苑』2008 年 17 期。
- ¹⁸ 竹林作、張景祥画『地雷』新美術出版社、1952 年 11 月初版、全 70 齣、印刷数 3 万冊。
- ¹⁹ 劉振業改編、王戈文字編輯、林濤画、劉端図画編輯『爆炸英雄李混子』河北人民美術出版社、1960 年 4 月初版、全 62 齣、印刷数 7 万 6 千百冊。
- ²⁰ 前掲『爆炸英雄李混子』、25 齣。原文は以下の通り。「那知太阳雷改了脾气，没等太阳出来，刚到屋里就爆炸了」。
- ²¹ 中国人民解放军工程兵司令部編『地雷和地雷戦』中国青年出版社、1966 年 2 月第 1 版、全 69 頁、印刷数 55 万冊。原文は以下の通り。「全民皆兵，是毛主席的人民战争的伟大军事思想的产物。（中略）自从一九五八年毛主席号召大办民兵师以来，民兵组织得到了空前的大发展，民兵工作进入了一个新的历史阶段。//目前，美帝国主义正在扩大侵略越南的战争，在全世界加紧推行侵略政策和战争政策。它继续霸占着我国的领土台湾，不断派出军舰和军用飞机，侵犯我国领海领空，进行军事挑衅。蒋介石匪帮在美帝国主义支持下，不断派遣武装匪特，进行骚扰。已经被推翻了的反动阶级和那些敌视社会主义的分子，不甘心死亡，妄图复辟。只要还有帝国主义和反动派，我们就决不放下手中武器，时刻保持警惕。我们必须努力学习毛主席著作，提高政治思想觉悟，积极参加军事训练，增强杀敌本领，认真执行民兵任务，为巩固国防、保卫社会主义革命和社会主义建设而斗争。一旦发生紧急情况，我们民兵就能真正做到召之即来，来之能战，战之能胜，有力地配合解放军，彻底干净地歼灭敌人」。//は改行を示す。

- ²² 『人民日報』1967年6月18日第一版。原文は以下の通り。「在两年八个月的时间内进行了五次核试验之后,今天,一九六七年六月十七日,中国的第一颗氢弹在中国的西部地区上空爆炸成功了」。
- ²³ 矯健作、倪紹勇ほか画『巧布地雷陣』上海人民出版社、1975年9月第1版、印刷数不明。
- ²⁴ 前掲『巧布地雷陣』、28頁。原文は以下の通り。「大坂还没来得及弄清是咋一回事,“轰”地一声,马蹄下又升起一道火光,烟云中大坂被抛到半空炸不见了」。
- ²⁵ 山東省煙台軍分區政治部編、王拳春・王啓民・袁大儀画、馮玉太表紙画『爆炸大王』人民美術出版社、1978年7月第1版、全86齣、印刷数100万冊。
- ²⁶ 前掲『爆炸大王』、70齣。原文は以下の通り。「他瞅了瞅登记所,先把一颗地雷挂到门背面,又把一颗雷放进办公桌旁的废纸篓里,雷弦拴在椅子腿上」。
- ²⁷ 前掲『爆炸大王』、73齣。原文は以下の通り。「第二天早晨,据点里的鬼子刚开门,轰隆一声,南门下的地雷爆炸了,两扇大门被炸得七零八落。开门的鬼子也丧了狗命」。
- ²⁸ 前掲『地雷戦』〔浙江版〕、131齣。原文は以下の通り。「中野顾不得伤痛,踉踉跄跄地只顾逃命。他已给地雷炸昏了,满脑子里都好像地雷在轰轰轰地炸。一阵晕眩,觉得天旋地转,眼前蓦地出现了一个大地雷,而且越来越大,吓得他魂飞魄散」。
- ²⁹ 前掲『地雷戦』〔浙江版〕、132齣。原文は以下の通り。「中野出了一身冷汗,揉揉眼定睛一看,原来是块大山石,上面刻着“镇妖石”三个大字」。
- ³⁰ 邵子南『李勇大擺地雷陣』生活・読書・新知聯合發行所、1949年8月初版。
- ³¹ 中央電視台のドキュメンタリー番組『電影伝奇』のインタビューによる(2005年7月16日放映)。以下のサイトで視聴可能である。http://www.56.com/u22/v_NTg1MTI1MzE.html (2016年2月6日確認)。
- ³² 『西遊記』については、中野美代子『西遊記の秘密』岩波書店、2003年、中野美代子『西遊記』岩波書店、2000年を参照した。また、「石」の物語については、ジン・ワン『石の物語 中国の石伝説と『紅樓夢』『水滸伝』『西遊記』を読む』廣瀬玲子訳、法政大学出版局、2015年に詳しい。
- ³³ 1884年5月8日(光緒10年4月14日)から1898年8月(光緒24年7月)まで発行された旬刊の絵入り新聞。イギリス人アーネスト・メイジャーによって創設された上海の申報館より発行、同館付設の点石齋石印書局により石版技術で印刷された。『点石齋画報』の挿画については、三山陵「呉友如と『点石齋画報』——ペン画と写真製版石印」、『近代中国美術の胎動』(アジア遊学168) 勉誠出版、2013年に詳しい。
- ³⁴ 『点石齋画報』に描かれる怪物イメージについては、以下の著作に詳しい。武田雅哉「車輪の下——鉄道事故の画廊」、『近代の日本・西洋・中国における外国人イメージの総合的研究』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤(B)一般)研究成果報告書(課題番号16320041)、平成19(2007)年、武田雅哉『〈鬼子〉たちの肖像』中央公論新社、2005年、武田雅哉『清朝絵師呉友如の事件帖』作品社、1998年、中野美代子・武田雅哉編訳『世紀末中国のかわら版 絵入新聞『点石齋画報』の世界』福武書店、1989年。

【参考文献】

- 応雄「中国映画の中の日本人像」『饕餮』第8号、2000年
- 呉友如ほか画『点石齋画報・大可堂版』(全15冊)上海画報出版社、2001年
- 李約瑟(ジョセフ・ニーダム)『李約瑟中国科学技術史』(第五卷、科学及相關記述、第七分冊、軍事技術:火薬の史詩)劉曉燕ほか訳、科学出版社、2005年

*本研究は、科研費10434359、25283001の助成を受けたものです。

*本稿執筆にあたり、武田雅哉氏に一部の資料をご提供いただきました。お礼申し上げます。